

リーフイ合回 Leafy's Anthology Returns また〜んず

DL!



ご挨拶

みなさま初めましての人は初めまして！
初めてじゃない人はどうもいつもの俺だよはろー！
TS界隈の超局所的で色々良くさせて頂いているリーフィです。

軽く自己紹介をさせてください。
私はすごく雑に言うなら
某一頭身キャラをちょっとだけ弄ったものを
自己投影アバターとして使って某tsfコミュニティで遊んでたら
「女の子にならないの？」と聞かれたんですね
「それは自己投影キャラなので俺が女体化されたみたいで
恥ずかしいですテレテレ！」と言ってたら
気づいたら女体化絵を勝手に描かれちゃい
気づいたらそれが広まり
気づいたら女体化する人の烙印を押され
気づいたら取り返しのつかない事になっちゃった
そんな男、それが私です。チキショウ！！！！！！

なのでこの本は、ある種「オリキャラts本」なのですが
それと同時に「自分が女体化されてるのを集めた本」です
なんの羞恥プレイなんですかねほんとに??????

でも、総勢60名！圧倒的人数！
ここまでの方が集まって、ましてや私のオリキャラ兼私の
合同本を作れたのは、皆様のおかげです。
本当に最大級の感謝を！

次はまーほぼないだろう、一度限りの超豪華TS本
お楽しみに！

素晴らしき参加者の方々

総勢60人の方々に参加していただきました！本当にありがとうございました！

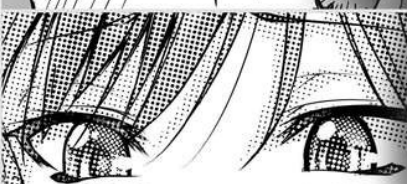
皆様素晴らしい原稿ばかり！とんでもなく豪華な本になってると思います！

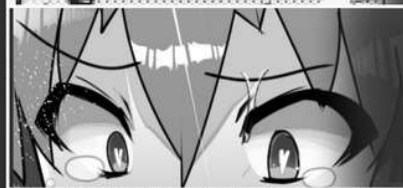
でも一個だけ、スマセン一個だけ！私からすっっっっっっっごいギモンがあります！！

「何故俺の女体化姿が多いのか」に関しては

なんで????????????????????????????

 工藤うき 8P	 くろ〜ん 18P
 みゅーけ 9P	 木下ささみ 19P
 森下真央 10P	 カネコナオヤ 20P
 おじおじさん 11P	 ひょうが 21P
 Salut 12P	 阿多溜ますか 22P
 無限の須田時計 13P	 祥梵 23P
 謎中 14P	 桜すず 24P
 ぴぴけ 15P	 炎帝竹輪太郎 25P
 四葉チカ 16~17P	 hirateuchi 26P

	すがり 27P		てふ 39P~40P
	Rain 28P	小説 「緑玉と淫魔」	このざま 41P
	工藤うき 29~30P	小説 「TSTFメスケモサキュバスリーフィ」	ミキマル 42~47P
	海籠ろじ 31P	小説 「その夢はただの願望なのか？」	水姫七瀬 48~55P
	はちたろう 32P		水面 56P
	eta 33P		三日月ネコ 57~58P
	ギンパニシ 34P		いるこ 59~60P
	ズンダリンダ 35P		あるふれっ鳥 61~63P
	かもり 36P		骨機ツネ 64P
	めた子 37P		おうつち 65~66P
	まりも 38P & 表紙!		REIA 67~70P

	Jupiter D Zweistein 71~74P		なつのみ 97P
	新生t P75		んごんご 98P
	Root 76P		るくすりあ 99~102P
	daice 77~78P		むらさきいろ オレンジ 103~104P
	オ〜ミチ 79~82P		くまのみ 105~106P
	メリケン 83~86P		星野かえで 107~108P
	せりなさん 87~89P		はんげしょう 109~112P
	四捨弐 90P		おしん 113~116P
	しろクラゲ 91~96P		いぬくりいむ あいす 117P

総勢60名!

+ワイ!

この同人誌の
メインキャラ
リーフィ(TS)

…えー…この度は
「リーフィ合同」購入頂き
誠にありがとうございます
私が訳あって今は女の子な
リーフィです…

色々未熟な私が
すごい大ボリュームな
本を出す事が出来たのは
皆様の応援あってからの
ことでした…大変感謝…

折角の合同なのに
なーんで不機嫌なのよ♪
折角おめかししたのに♪

大人な事情で
「おめかし」を
せにゃあかん
からだよ！

いいじゃないー
色んなところに
配慮せず済むし
ずっとそれでいれば？

いやでも
俺は男だし…

まあ、確かに女の子の方がウケやすいから、俺も女の子に扮して、曲をうたうと男と女と両方から受けがいいかな？

さっさと
女体化して
くれた方が
楽だし

人の葛藤を
楽の一言で
ぶつた斬るな

まあ
そういう
わけだし…

にやあ…

早速楽しい楽しい合同タイム
初めて行きましょう♪
私もあなたも一緒になって
メスに堕ちるの♪

むに…♡

お、堕ちねえし！
俺は男！男だから！
そこは変わらねえからー！

俺は男…だ!!

なあ、葉っぱ
食べさせて
くれよ…







身も心も
すっかり女の子に
なっちゃったver.の
リーフィちゃんを
描きました！

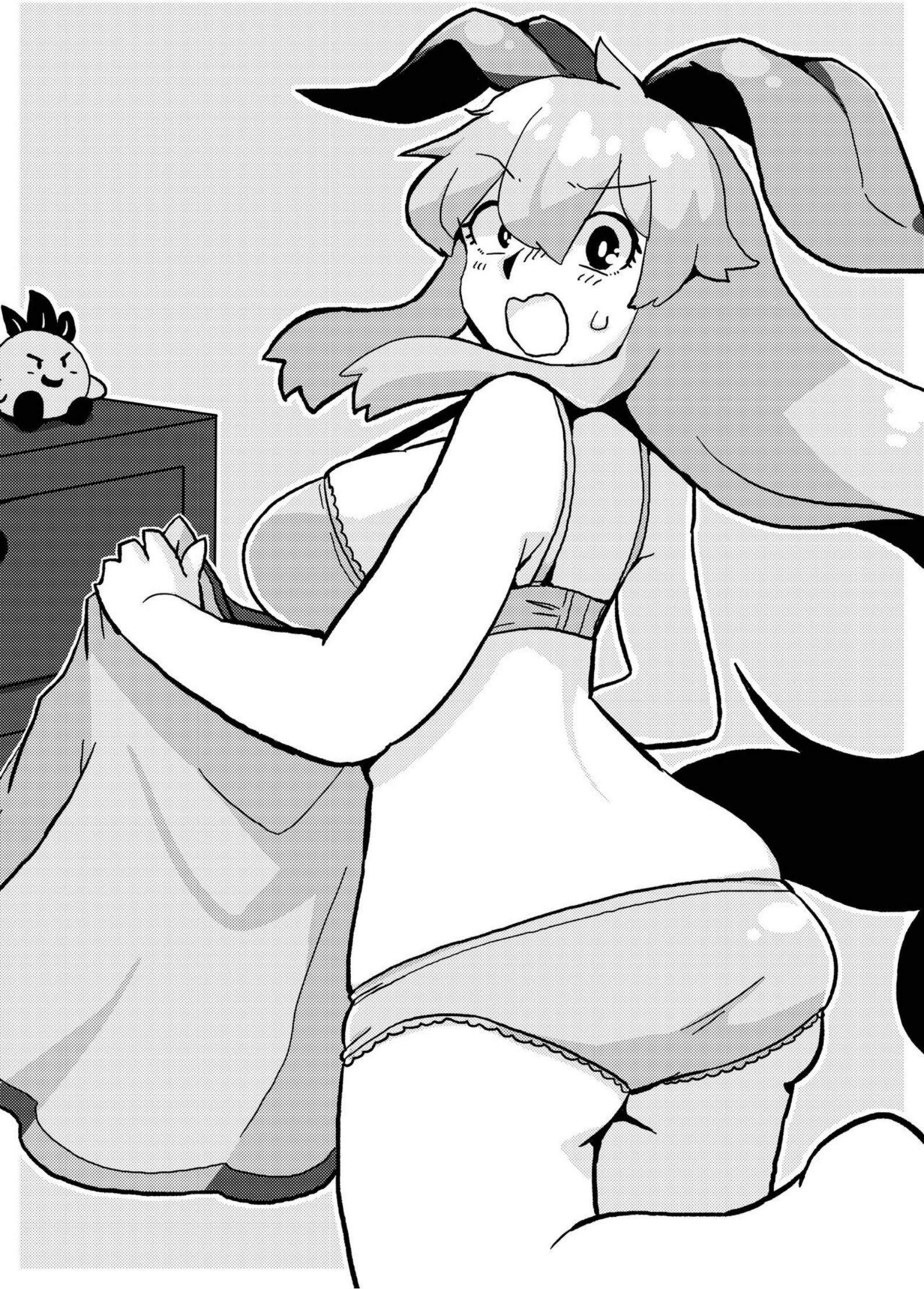
森下真央





Yuri☆Yalut







×スリーフィちゃんの
葉っぱがうさみみみたいで
可愛かったんで
バニーの格好を描いてみました！





一人こっそり

女の子の体になった自分を

確かめたくなった

リーフィちゃんは可愛い

くろ〜ん





サキュバス
ハーフィママ!!
♡

あ〜
♡
♡

サキュバス



かわつりや
2020 10.31



2020 *hyo*
リーちゃんも
エロいね、おねえ

お前……ッ
本当にこれで
男に戻るんだよな……!!?

さっ……

阿多溜ますか

内
タ
タ
メ

お加さしていたが
ありがとうござい
ました!!

ッ

オ



認知
できたよ。

認知
め
ないて
ごめんね。



リーフィ合同おめでとー！

参加した桜すすです。
普段は小説メインです。

お疲れ様です。
桜すすです。
まさか、まさか・・・
アナログをそのまま
入稿する馬鹿は
私だけだと思います。

リーフィちゃんは女の子。。

というより、
描いていたら。

成長した女性
みたくなりました。

嘘だ：鏡に映るサキュバスが俺：？
リーファイ！！俺に何をした！
えー？見たらわかるじゃない勇者様♡



敗者には眷属になってもらうのが
当たり前でしょ？ふふ♪
屈強な勇者から弱いサキュバスになった
事を体に教えてあげるからね♡

最高の種豆肉師

美少女おしさんにお

最後にカワキ像

をこしらえた元緑色

球体がカワキステイ

だったTS界のアイドル

リーフィちゃんは最高

イケメン

かっこ

いい子。





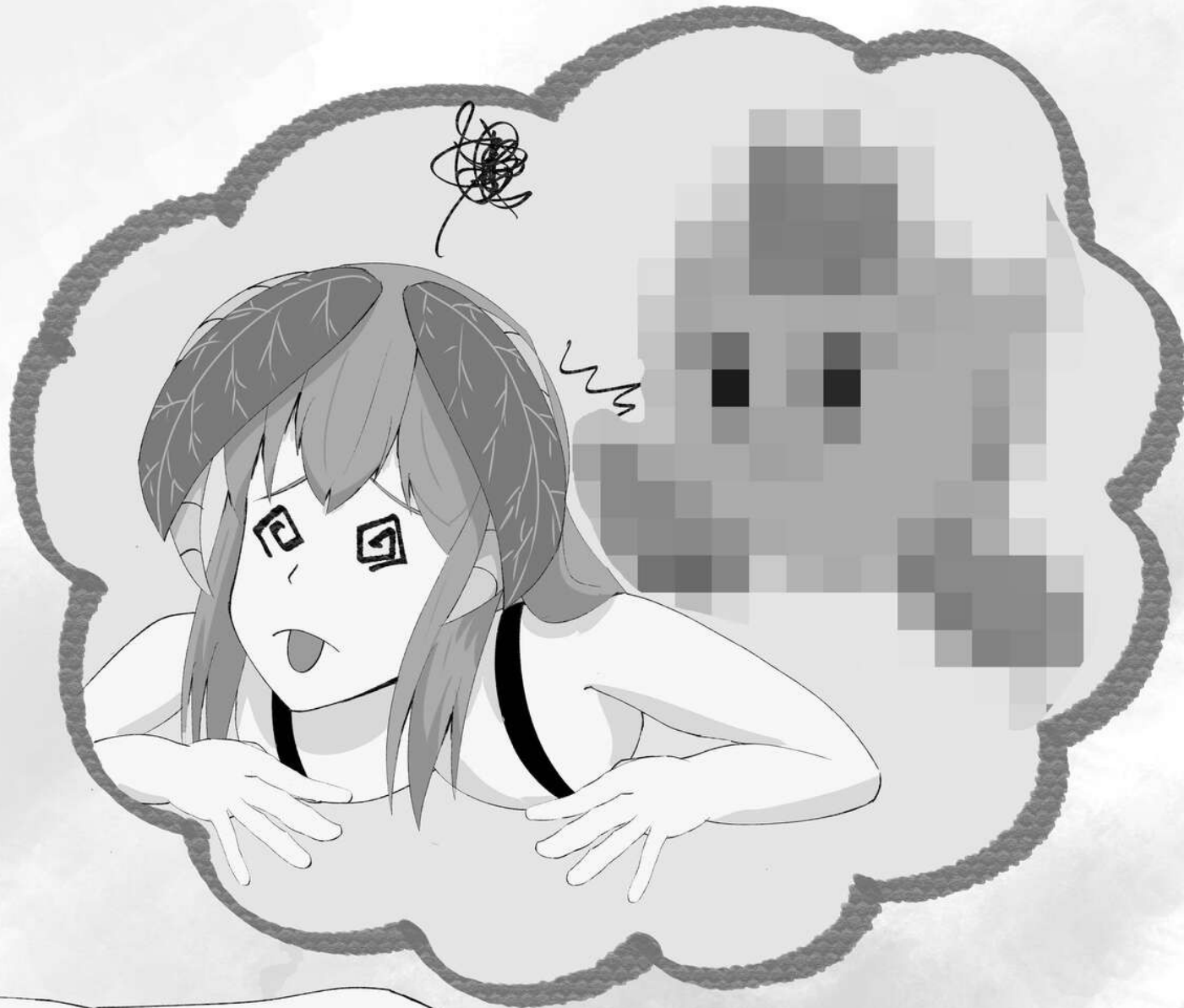


カイショウナシ









なぞのひかり







リ
ー
フ
イ
ン
ジ
ン

リリーちゃん

リーフ (リーフ) リー

のちちふーり

好き^すなもので

お祝^{いわ}いしよっ！

リリー・フーちゃん
さききゅぶす

さーもん

ホルモン

豚たん

鳥皮 とりかわ

ねぎ ねぎ
スギ トロ スギ 抜き

エビ









「……で」
「なんで俺が二人になってるんだよ」
「知らんがな。昼寝して起きたらこれだよ」
少女化したリーフィと二頭身リーフィは呆然として床に寝転がっていた。

「特に理由のない分裂」

その日の日差しは、リーフィを眠りに誘うには十分なほど暖かく、力強いものだった。

「はあ……こんな日は昼寝するに限るな」

その二頭身の体を、フローリングの上に横たえる。まるで、緑の玉が床の上に転がっているような状態だ。すぐに、彼の目は閉じ、眠りに落ちてしまった。

その時、日差しが強まり、リーフィの頭に生えている葉がピクツと反応した。そのうちの真ん中に生えている一枚が、もぎとれると同時に、彼の体が光りだした。

光の玉となったリーフィの体が、上下に伸びていく。子供ほどの大きさとなると、体の一部が緑の髪となって分かれ、手足が長く細く伸びる。

「ん、ん……」

その胸がググツと盛り上がると、さらに膨らみ、新たに形成された服をグイグイと引っ張って、その間に深い谷間を形成していく。

長く伸びた脚にムチムチと皮下脂肪がつくと、変化は終わった。

光が引いていくと、そこには、美少女と化したリーフィが横たわっていた。

「やば、こんな所で寝落ちはずいって……って、声が!？」

リーフィは目を覚ますとすぐに喉を押さえた。体を起こそうとしたが、体が重く持ち上がらない。

「って、喉があるってことは……また女体化したのか!」
眼下でたゆんたゆんと揺れる胸を見て、ため息をつく。

「おなかも重い……って、これは……」

胸の下に、もう一つの球体があった。その肌触り、その上に生えているらしい植物の葉。

「まさか、俺……?」

「何だお前っ!」と、お腹の上から声が聞こえる。その声は、紛れもない元のリーフィの声。

「お前こそ誰だよ!俺はリーフィだよ!」

「そうっばい……な。」

元のリーフィは大きくため息をついた。

「……で」

「なんで俺が二人になってるんだよ」

互いに考えていることもだいたい分かる。

「知らんがな。昼寝して置きたらこれだよ」

少女化したリーフィと二頭身リーフィは呆然として床に寝転がっていた。

TS界の真実の御伽噺。

TS界で女体化かますと……“リーファイ緑玉”が来襲る!!

「あ……あのサキユバスリーファイ淫魔の姉御……」

「なんだい出田楽、あんたも女体化プレイしたいのかい？」

淫魔と呼ばれた女性とその下っ端の男、そして周囲には大勢の女、女、女否、大勢の元男達、女体化した男たちが各々様々な行為で楽しんでた。

「オレは別にその気はねえですよ、ただこの人数はちいとヤバくねえか？
こんだだけ大勢だどこから漏れるか……」

「ヤバいのが好都合イカスのよ、この女体化はさあ、リーファイ“緑玉”を誘い出すためや
てるの！漏れれば漏れるほど“緑玉”はきつと……」

興奮する淫魔、そんな淫魔に向けて銃を突きつける下っ端。

「…付いていけねえ、オレは抜けさせてもらうぜ淫魔!!」

そんな下っ端の行動を鼻で笑い、自慢の尻尾で銃をたたつ切る淫魔。

「えっ……？」

「ウフ…銃なんて遅い遅い、そんなんじや淫魔なんて殺せやしないわよ」

淫魔の尻尾がそのまま下っ端に刺さり気絶する、気絶した下っ端の身体が淫魔の能力で女性へと変わっていった。

「さて、女の子新人ちゃんも女性として楽しめるように調教してあげる！」

淫魔が調教しようと手を伸ばそうとした瞬間、部屋のドアが大きな音を立てて開かれ、そこには一頭身の葉っぱを付けたリーファイ緑玉がいた。

「おう、リーファイ緑玉だ!!」

その緑玉を見た淫魔は、一目散に緑玉へと詰め寄った。

「待っていた!!緑玉と会えるこの瞬間をずっと待っていた!!」

淫魔が興奮気味に尻尾を構え、緑玉へと当てようとする。

「緑玉、私たちが淫魔として活動しているだけなのに、ただの男を女にして
快樂付けにして遊んでいただけなのに、それを邪魔してきた恨みを晴ら」

すべて言い終わる前に、淫魔の身体は緑玉の葉っぱ攻撃で半分になった。

「あら…思ったよりも鬼速い…殺るじゃない…緑玉い…」

ブツ殺した淫魔へと語り掛けるように緑玉が言う。

「オレよオ、誰彼構わずに女体化されまくってキレているんだよ。オレ以外
に女体化させて遊んでんじゃねーぞ淫魔!!」

淫魔をブツ殺した緑玉が残された女たちに葉っぱを投げつける

「男に戻りたかったらその葉っぱを使え、それで男の姿に戻れるぞ」
そうして女体化した男たちを残して緑玉は去っていった。

これは、女体化の物語

リーファイ サキユバスリーファイ
緑玉と淫魔

江戸の昔より400年続く因縁の種族共の性転換物語
何方が女体化するか男に戻るかの戦い!!!

「リーフィちゃんをサキュバスにしたいけどキャラが被るのでメスケモサキュバスリーフィにしたい」

「唐突に何?」

サキュバスリーフィはリーフィをメスリーフィに性転換させて性的に弄るのが生きがいである。

「リーフィちゃんは女の子でしょ?」と言う世界中の大きなお友達の声援が力となって生み出されたサキュバスリーフィは事ある毎にリーフィを女の子にしていたが熟年カップルの様にここ最近はどうもマンネリ気味であり、彼女の悩みのタネであった。

そんな中、サキュバスリーフィはハッと何か良いことが思いついたと一頭身姿のリーフィの前に突然現われると突拍子も無い事を言い出した。それが冒頭の台詞である。

「いや、何時もリーフィちゃんは女の子にしては『俺は男だ!』って否定するでしょ。ある意味様式的な感じでそれはそれで好きだけど、時には私も受けに回りたいなーと思って」

「ツッコみたい事は沢山あるけどじゃあなんでケモだよ」

「いやだって只のサキュバスだと私の2Pカラーになっちゃうし差別化? それにほら、悪魔的にバフォメットとかの前例もあるんだしへーきへーきだつて」

普段は加虐心に操られるままリーフィちゃんに襲いかかるが時には求められたいのも女の子の性。それならば同じサキュバスにさせて襲って貰えば良いと言う天才的な発想。ただキャラ被りはゴメンと言うことでメスケモである。

「話が異次元に飛んでいってよく分からないんだけど……」

「四の五の言わずにメスケモサキュバスになれビーム!」

「あばばばb!!」

ページの都合上さつさとメスケモにさせられたリーフィはいつも通りの変身バンクで一頭身の姿から女の子に女体化する。

素っ裸で大つきなおっぱいを片腕で隠し、女の子座りで涙を浮かべながらくっ殺の表情で何時もの格好で睨み付けるメスリーフィ。すると彼女の手先から変化が訪れた。

指先から黒くツンツンとした毛がザワザワと音を立てながら腕全体を包み込み、爪は硬く短く、まるで牛の蹄のように硬質化すると手の平にはザラザラとした肉乳がうっすらと浮かび上がる。

それは腕のみならず足先の方も同等に変化が現われ、足の指はつながり、爪は一つの大きな弧を描いて蹄となると、踵が浮いた足回りに形を変え、太ももは大きく、むっちりとしたお尻になると小さな尻尾がぴよこんと顔を出す。

お腹周りはポツポツと二つの乳首に沿って、薄く生えた黒い毛の隙間から小さな乳頭が顔を出す。鼻がつり上がり口周りが前へ前へとググツと伸びるとちよこんと控えめなマズルが形成され、湿った鼻先が顔を出し、石臼のような平べったい歯が生え揃う。

耳は横向きにくるつと弧を描きイカ耳のように羊の耳が生えると頭の葉っぱの内側から白い角がぐるぐると螺旋を描きながら顔を出す。

最後に背中からコウモリのような一對の黒い羽が生え揃うとそこには一匹の黒ヤギのメスケモが。

『ムチッ:♡ムチッ:♡』と擬音が発せられそうな姿の、全身毛皮に覆われているためコンプラ的には問題ないケモセーフな黒ヤギ。

そんなメスケモが困惑顔で自分の身体の変化に混乱したまま涙を浮かべてあたふたする。

これがサキュバスリーフィの生み出した新しいリーフィ。『メスケモサキュバスリーフィ』である。

「初めてだったけど上出来、上出来。やっぱり悪魔なら黒ヤギっ娘よね」

「女の子にされるのは百歩譲って人間も辞めるなんて……」

「えっ、今までの一頭身も人間に区分されるの??」

床に項垂れ落ち込むリーフィを傍目に首をかしげるサキュバスリーフィ。しかしそのような事は二の次である。

「それじゃあそーれえ♡。私を襲いなさーい!」

そう言っつてじつと黒ヤギになったリーフィをのぞき込むサキュバスリーフィ。するとメスケモリーフィのお腹にうっすらと模様、淫紋が浮かび上がる……はずだった。

「……淫紋仕込んでたけどそれ……ちゃんと光ってる……よね?」

「……」

メスケモリーフィは背中を丸めて密集した黒い毛を太い指でどかしながら毛の内側を凝視し模様を探し出す。

本来であればぼんやりと淫紋が光り、催眠状態に陥るのだが如何せん肝心の淫紋が黒い毛に覆われたせいで確認出来ない。しかし蹄の様な太い爪では上手く探し出すことが出来ない為に向に見つかる気配はなく、仕方なくサキュバスリーフィが身を乗り出した。

「……ちよっとそのままお腹を見せたままにして」

「あつ、ちよ、こちよばゆい。やつ、やめい!」

細い指先を流れる毛に逆らう様に滑らしながらエッチな印を探し始める。二人の間になんとも言えない空気が流れ出すがここで素に帰る訳にはいかない。エッチにムードは大切だが勢いも同じぐらい大切なのだ。

そうして暫く、ぷっくり膨らんだ恥丘の上に指が掛かった時である。そこにはうっすらと光る複雑な模様が描かれている部位が。

「あつ、あつた。あつた!」

「やつ、やったあ!!!」

目的と過程が逆になってしまった二人は思わず抱きついて淫紋を見つけ出した事に喜び抱きつく。もはや、エッチな事など頭の片隅に押しやられ、二人は達成感に包まれた。

しかしだ。喜びで抱きついた拍子に二人の淫紋が重なり合う。

二つの淫紋は共鳴し青白く光り出すとサキュバスリーフィの頭に電流が走るように快感がほとばしり、突然身体中からドツと汗と同時に愛液が溢れ出したのだ。

甘い香りが辺り一面を醸し出し、突然の事で頭の中がパニックになるサキュバスリーフィは抱きついたリーフィの横顔を覗き込んだ。

そこには目に生気が感じられず、ハイライトを消したリーフィが黙っつてじつと項垂れていた。そして股間に感じる熱いモノ。

恐る恐る下を向くと、そこには赤く充血した立派なイチモツが顔を出す。人間のペニスとは違い、細く長くそり立ったソレはサキュバスリーフィのお腹にピタッとくっ付いていた。

これはヤバイと危機を感じたサキュバスリーフィは急いでその場を立ち去ろうとするが肩に手を回され、押さえ込まれているため身動きが取れない。

羽を使って飛び去ろうにも、人外パワーを駆使してその場から逃げ去ろうとも相手は今、自分と同じ人外であり人よりも力が強い獣だと言う事実が彼女の顔を真っ青にさせる。

確かに自分は時には受けにも回りたいといった。だからといってチンコが生えるのは想定外であるしそもそもなでこうなっているのか混乱の真っ只中。

元々男の子を女の子にTSさせ、更に種族もカテゴリーも変えていればバグが一つや二つ発生することなどあり得ない話ではない。互いに相手へ性的な契約を示す淫紋が強く惹かれ合った結果が正気を失い獣チンコが生えた『暴走ふたなりメスケモサキュバスリーフィ』なのである。

そんなメスケモリーフィがサキュバスリーフィに襲いかかる。

「えっ、ちょ、ちょっと待って。ちんちんでもハードル高いのに、ケモチンはマニアック過ぎて人を選んじやう！」

足掻こうにも種族差で敵うはずも無く、ガツチリと捕まれたサキュバスリーフィ。

メスケモリーフィはそんな彼女のドスケベパンツを掴み力任せにひん剥くと彼女の恥部が露わになった。

ペニスから分泌されたカウパーの媚薬効果でダバダバと愛液が溢れ、ぐちゃぐちゃとなった秘部がキュンキュンと音を立てチンチンを受け入れたいとサキュバスとしての、女としての本能が求めている。

「ああ……だめだめっ…駄目……っ」

四の五の言わず、愛撫など無く、獣のように無情に突っ込まれたペニスがサキュバスリーフィの膣内を押し広げ、奥へ奥へと押し込まれ、子宮口を開くとそのまま腰を小刻みに振って長いペニスをむりやり押し込んだ。

途端に鋭い痛みと同等の快感がシナプスを通り身体中に広がり、全身を震えさし、小刻みに痙攣する。

性的なモノ・コトに強力なバフ効果があるからこそその快樂。

常人であれば内臓破裂する可能性だって大にあるケモチンであるがそこはサキュバスであり、暴力的な子作りセックスであっても獲物を食り付くような獣姦のアブノーマルな刺激がペニスを受け入れ、感じるために感覚を鋭く、淫らしく甘受する。

「あっ……いや……だめなの……だめなのにい!!」

「はあ、はあ、はあっ……ふう……ふう……う……う……」

「あ……ああ……あ……ああ……」

女になったリーフィとの性的な遊びとは違う、ただただ子孫を残すための種付けセックス、いや交尾。

押し倒され、のし掛かるメスケモリーフィにとってサキュバスリーフィは只のモノと同じで彼女の瞳に自分は映し出されていない。

しかしそれも今は良いなと思ってしまるのがサキュバスとしての性。まるで全身が性感帯となって彼女のペニスを扱くような感覚。そしてペニスが大きく膨らむと熱くなつて波を打ち始める。

「いいよ、出して……私に出してっ♡」

「うっ……ふっう……うう……っ……!!」

ピュルルと細く、勢いよく鈴口から粘度の低い精液が噴出され子宮を真っ白に染め、お腹を膨らませながら溢れた精液がジャバジャバと音を立てながら膣口から溢れ出す。

『こぼっ…こぼっ……』と音を出しながら溢れる精液が差し込まれたペニスとの隙間から排液されるが射精は止まることを知らず、確実に子孫を残すために暫く続いた。

そんなメスケモリーフィはまるで糸の切れた人形のようにサキュバスリーフィへ倒れ込み、息が上がり、イッた目のサキュバスリーフィはそんなメスケモリーフィに抱きついた。

射精はそれから暫く続いたようでそれまでサキュバスリーフィは只々膣でチンポを挟み込みながら最後の一滴まで搾り取る。それはもうサキュバスの維持と誇りである。

こうして獣のようなセックスは終わりを告げ、氣を失ったメスケモリーフィは浅い呼吸を繰り返しながら深い眠りの世界に旅立った。

「……やっぱリーフィちゃんは普通の女の子にした方が楽しいけど、やられっぱなしも腑に落ちないのよね……」

天ぷらはお塩でこそ素材の味がよく分かるのと同じで属性マシマシ山盛り天井にしたところでお腹いっぱいになるだけ気がついたサキュバスリーフィは隣で氣を失ったように眠るメスケモリーフィの髪を搔上げ彼女の寝顔を覗き見ながら怪しい笑みを浮かべる。

相手は意識を失っており、今は何をしても起き上がることはないだろう。暴走したのは予想外であるが折角のメスケモリーフィちゃんだ。遊ばなくては勿体ない。

「まったく……そんなにすやすやと眠っちゃって。でも、私はまだ物足りないのよねえ……」

「だから、おもちゃにした罰を味合わせてア・ゲ・ル♡」

次の日、元の一頭身の姿に戻ったリーフィは昨日の情事を覚えていなかったが全身筋肉痛でまともに動けなかったそうだ。

その隣でサキュバスリーフィのお肌はつやつやと輝いており、食卓には何故か新鮮な山羊のフレッシュチーズが並んでいたのであった。

■その夢はただの願望なのか？

著・水姫 七瀬

それは、リーフィが『男が女体化サキュバスにTSした絵』をツイッターにアップしたある日の夜のことだった。

「おっ！ 今日の絵は反応が良いなあ……。やつぱり女体化サキュバスものはみんな大好きだな！」

ツイッターに上げた画像に次々と感想が付いて、ついついになまりと笑みを浮かべてしまう。そんな感想の中には、いつもお決まりのように『これってリーフィが体験したことだね？』という返信の数々が……。

「って、実体験なわけないだろ！ 『リアルリーフィちゃんサキュバス化するのはいつですか？』だと？ 『そんな日は!!! 絶対に!!! 来ない!!!』つと返信しとくか……。リアルで女体化なんかしたら大変だったの！」

リーフィはネタをネタとしてとらえ、笑いながら丁寧な返信をした。「まあ、でも……。リアルで変身能力があったらって思うことは、誰でも一回くらいあるはずだよなあ……」

そう口にしながらかベッドに倒れ込んだリーフィは目を閉じながら思う。

（ああ、変身能力があったら、もっと楽しいことができるんだろうなあ……）
布団を被って後は寝るだけ……のはずだった。

『そうか、それがキミの望みならば、ボクがかなえてあげようじゃないか』

どこからか声が聞こえて飛び起きると、いつもより遙かに視界が低く、自分の部屋の中であるはずなのに全てを見上げるような形で視界情報が目に入る。

「これは……一体どうなってるんだ？ これじゃあまるで、オレの身長が低くなったような……はっ!? まさか……!!」

リーフィが慌てて見回し、ステテテとダッシュして姿見に駆け寄った。

果たしてそこに映ったものは……緑色をした一頭身のリーフィだった。

「どえええええええええええええええ!!? どうなってるんだこれえ!!」

いきなり一頭身になっていたことに驚き、声を荒げるリーフィ。その真上か

ら『ぎゅむ』つという音と共になにかが踏みつけて笑いながら声を上げる。

「どうかしら？ あなたの望みを叶えてあげたんだよ？ 嬉しいでしょ？」

鏡越しに、自分を踏みつけた存在を見たリーフィが「は？」と声を漏らす。緑色をした一頭身になった自分を見事な尻に敷いていたのは、どう見ても美しい姿をした淫魔——サキュバスのお姉さんだったからだ。

「これは夢……でいいんだよね？ というか現実じゃありえないんだけど！」

「そうだねえ？ これは夢で、ボクは淫魔。ここはキミの夢の中だけだよ、キミの願望を叶えてあげたんだから、ボクにキミの精気をちょうだい♥」

サキュバスのお姉さんは色気たっぷりの声でリーフィに囁き、押し掛かる。

「……おやあ？ そう言えばキミは、その体でセックスできるのかなあ？」

「は……え？」

「この真ん丸ボディに、おちんちんは付いてるのな？ って言ったんだよ」

「なっ……どわあああッ!」

絶句するリーフィにサキュバスのお姉さんが手を伸ばすと、一気にひっくり返す。それは俗にいう、『ちんぐり返し』という体勢なのだが、残念なことに

『一頭身』であるリーフィにちんちんは付いていない。大事なことで二度言うが、一頭身のリーフィにはちんちんは付いていないのだ!!

「おやおやあ？ やつぱりおちんちんは付いていないのか、残念だなあ……」

残念そうにため息を吐きながら、リーフィの体に丰满な胸を押し付けながら押し掛かり続けるサキュバスのお姉さん。ぐりぐりと押し潰されるリーフィ。

「でっ、も！ この触り心地の良いボディは気に入っちゃった♥ ようし、こ

れからキミは、ボクの抱き枕に任命してあ・げ・る♥」

「なにを言ってるんだ、そんなの絶対にイヤだあ!!」

ジタバタもがいて逃げようとするリーフィだが、サキュバスのお姉さんの力の方が強く、その『魔の手』から逃れられない。目を覚ますまで散々抱き枕としてあそばれ続けたのだ……。



ハッと目を覚ましたリーフィが勢い良くベッドから跳ね起きる。

「……なんだ、夢か……」

安心しきった声で呟いた後、安どのため息をこぼした。

「一体なんだったんだよ、今日の夢は……。散々過ぎるだろ……」

サキュバスのお姉さんにずっと抱き枕にされたまま、手も足も出せずに一晚を過ごす苦痛、それが分かるだろうか？ 男性諸君なら分かるだろうか？ 美しい女性に押し掛かれてるのに、手も足も出ない辛さを……。

「ああいうのも、悪夢とか言えるのかな？」

小さくため息を吐いて着替えて顔を洗い、家族と一緒に朝ごはんを食べ始めるリーフィ。そんな彼を家族たちが心配そうな顔をして見守る。

「ねえ、大丈夫？ あんた、顔がいつもより丸くて緑色をしてるわよ？」

リーフィは母親のそんな言葉を聞いて「人間の顔が緑色になるわけがない」と考えながら「そんなまさか」と笑って見せる。

「それじゃあ、行ってきます」

朝食を食べ終えて家を出ると、そこはいつもの日常だった。

いや、はずだった。

顔を合わせる知り合い全員から、『今日は顔色が緑だけど大丈夫？』と口々に聞かれ続けられると、さすがに不安になって来る。

（もしかして、気付いてないだけでマズい病気にでもなってるんじゃない……）

そんな不安を感じながら、リーフィは今日もいつも通り過ごし、夜にはツイッターに画像を上げて風呂に入り、寝てしまった。そして――。

そして気付くと、昨日の夢と同じ場所に立っていた。

「こんばんは、リーフィちゃん」

背後から声が掛かると共に、誰かが背中中に押し掛かる感触がした。

確認するまでもなく、昨日の夢に出て来たサキュバスのお姉さんだった。

「なになっ、なんで？ あれは夢だったんじゃない……」

「そう、昨日のことは全部が、ゆ・め・の・な・か！ そしてここもね？」

「……まさか!？」

ハッとしたリーフィが、慌ててステテテとダッシュして姿見に駆け寄ると、鏡に映った自分の姿は『緑色をした真ん丸な一頭身のリーフィ』だった。

「なんでまた一頭身になってるんだよお!!？」

絶望に染まった絶叫を上げたリーフィの上に、ぎゅむっと重みが生まれる。「言ったでしょ？ キミを気に入ったって。だからまた来たの、よろしく♡」
「NO~~~~~うっ!!」

悲鳴を上げるリーフィ。しかし、彼には逃れる術はなく、延々と抱き枕にされ続けることしかできない。そしてそれはサキュバスが飽きるまで続くのだ。これが一日二日なら耐えられる。

しかし、三日四日と続くと話は別だ。日に日に顔色が『緑色』の変色し、丸くなっていく上に生気を失っていく。

そんなリーフィの姿に、リーフィの家族も心配する一方で……。

「大丈夫？ 病院に行った方がいいんじゃないの？」

と、心配そうに声を掛けられるようになっていく。

「いい加減にしろ！ もう一週間だぞ！ 毎日毎日抱き枕にしがたつて！」

「えー？ いいじゃない。キミの願望をかなえてあげたんだよ？ 某ゲームキャラに似た『変身能力がある姿』にしてあげたんだから付き合ってよ♡」

耳元で囁かれた言葉。それを聞いた瞬間、リーフィの頭に閃きが生まれる。

（そうだ、望んだ体になったのなら吸い込んだんじゃないかね？）

リーフィはすぐに大きく口を開けてサキュバスのお姉さんを――

「へ？ ちよつ、うわああっ!? 不意打ちはらめえっ!!」

「ごっくんっ!!」

――一気に飲み込んだ。その瞬間リーフィの体が光り輝き、変化していく。「ははっ、これで解放された！ オレは解放されたんだ！」

嬉しくなって小躍りをし始めるリーフィ。しかし、直後に自分の胸部がゆさゆさと揺れることに違和感を覚えて固まった。

そう、その振動はまるでオッパイが揺れているような、そんな感覚だった。

「まさか、まさかまさかまさかっ！」

ひとつの可能性に思い至り、姿見に自身を映すと、頭に植物の葉っぱを生やしたような緑色のロングヘアーをした可愛らしい淫魔の女の子の姿が――。

「これって、いつも冗談半分で描いていたサキュバスリーフィじゃねえか!!？」

「ああ、やつちやつたね？　とうとうやつちやつたね？」

耳元で囁やかれて驚き、振り向くとサキュバスのお姉さんが立っていた。

「言ったよね？　キミの願いをかなえてあげた、って。もちろん、その体には吸い込んだ相手をコピーしちゃう能力もあるに決まってるでしょ」

「なっ、なんで吸い込んだのに……!？」

いるはずのない姿に驚いて問いただと、くすくすと笑い声をあげる。

「だってココは夢の中だよ？　ボクたち淫魔には生死さえも自由自在なのさ」

「そんな……でも、ここはオレの夢なんだからオレの自由に――」

「残念、淫魔の本能は序列に忠実だね？　ボクはキミの親のようなものだ。だから当然、キミはボクに夢の中では逆らえないのさ、あはははははっ♥」

哄笑とも言えるような笑い声をあげながらサキュバスが歩み寄る。

いや、本当にサキュバスなのだろうか？　その姿が、輪郭がどどんぼやけてはじめて、顔つきは可愛らしく、体つきは中性的なものに変化していく。

変化が終わると色気のあるお姉さんではなく、少年のような中性的な体つきに変化していたが、股間には中性的な体つきに似合わぬ巨根が聳えていた。

「あ？　驚いた？　でも仕方ないんだよ？　ボクたち上位淫魔は夢の持ち主としての『異性』の姿に変化してしまうんだ。今のキミは女の子だからね」

ねっとりとした嫌なものを感じてリーフィの顔が引き攣る。

（今のって、まさか……そんなわけ……）

リーフィは心の中で否定し続けたが、しかし、リーフィはそれがなんなのか

を本能で悟ってしまった。『それ』は男が女に対して抱く獣欲である、と。

「どうしたの？　顔が引き攣ってるよ？」

「ひっ、近寄るな！　オレは男だ！　男なんだぞっ!!？」

「いくらキミが男だって言い張っても、今のキミの体は淫魔の女の子だ」

顔を引き攣らせながら後ずさるリーフィを、面白そうに追い詰める淫魔。

「ふふっ、その恐怖に引き攣った顔、可愛くて食べちゃいたくらいだ」

「ひいっ……あっ――」

小さく悲鳴を上げて一気に距離を取ろうとしたリーフィの足がなにかにぶつかり、後ろに倒れてしまった。

とさつと乾いた音を立てたのはベッドだった。

「ふふっ、ボクを誘っているのかい？　淫魔になったばかりなのに淫乱な子だね？　しょうがないから、先輩であるボクがキミを調教してあげるよ」

淫魔はベッドに倒れ込んだリーフィに覆い被さり、手を掴んで拘束した。

「ひっ……あっ……れ？」

淫魔に押し倒されたリーフィは小さく悲鳴を上げながら警戒心を露わにした。いや、したはずだったのに、下腹部から湧き上がる熱い情欲に戸惑う。

「な……なんだ？　オレに、なにをっ！　なにをしたんだ!？」

「ボクはなにもしないよ？　ただ、可愛いキミを見つめているだけさ」

それは確かに本場で、身動きの取れないリーフィは顔を見つめられただけだ。それなのに、目の前の淫魔の瞳を見ているだけで情欲の炎が燃え上がる。

欲しい。

この雄に抱かれない。

この雄の欲望に塗れて溺れたい。

（いやいやいや、そんなことあるわけない！　オレは男だ、男なんだぞ!）湧き上がる情欲、いやその言葉では生ぬるい程の激しい性欲に抗うリーフィ。

その頬を撫でながら、そつと淫魔が囁く。

「それが淫魔の本能だよ。大丈夫、キミはもう人間じゃない。淫魔なんだから、その欲望に身を任せちゃえばいいんだよ」

正に悪魔の囁きであつたそれを耳にして、リーフィの理性が揺さぶられる。

「はっ……ああつ、嫌だ……。嫌なのにい……。はっ、はあ……んんっ♥」

——こぷり……こぷり……

必死に衝動に耐えているはずなのに下腹部の奥が勝手に震えて、ぬるぬるとしたモノが体の奥から溢れ零れて股間を濡らして行くのがわかる。

（なんでこんなっ！ オレは男、男なのに——）

「はは、口では嫌がつてるみたいだけど、本能に勝てるわけがない、ほら！」

——ぐちゅりっ

「んああッ♥」

いきなり淫魔の指が、リーフィの股間にできたばかりの淫裂に沈み込む。

「あはっ♥ ちょっと指を沈み込ませただけで可愛い声を上げるなんてさ」

——ぐちゅっ、にちゅっ、ぐちゅくちゅにちゅっ……

「あつ、んんッ♥ ひいいッ♥ あつ、ああッ♥ いっ……やだあつ！」

嬉しそうに笑みを浮かべながら淫裂の中を探り、肉芽を激しく擦り上げ始める淫魔。たつたそれだけのことなのにリーフィの腰が震え、跳ね上がり、歯を食い縛りながら必死に湧き上がる欲情に抗う。それでも耐え切れずに、口から嬌声が漏れ出てしまう。

「あふううッ♥ んんっ、ぐっ……あつああああああッ♥」

とうとう淫魔の指がリーフィの膣内にまで忍び込み、肉襞を撚る様に蠢く。

「あつはあつ……んっ♥ きっ、きついいッ！」

腰をがくがく震わせながら声を上げると、淫魔は小さく笑いながら「まだたつたの二本しか入ってないよ？」と楽しげに囁く。

（ウソだろ……？ こんな違和感がハンプないのにまだ二本だつて？）

信じられない気持ちを抑え切れず、自分の股間を見る。

淫魔がニヤニヤと笑みを浮かべながら自分の膣内に突き刺している二本の指

を、これでもかと思やうい形で強調して見せて来る。

「このままボクのを挿入したら、壊れちゃいそうだねえ」

「ひっ——、嫌だあ!! それだけは嫌だあ!!」

言葉の意味を理解してベッドの上を這うように逃げ出そうとするリーフィ。

しかし、淫魔は笑みを浮かべながらがっしりと腰を掴んで引き寄せた。

「可愛いお尻を振りながら見せ付けつけるなんて、後ろからされたいの？」

「ひいっ、違うっ！ ちがっ——ああッ!」

掴まれた腰を振りながら必死に逃げようともがいていたリーフィが、驚きの混じった艶やかな声を上げてしまう。淫魔が腰に纏わりついて指を膣内に挿入し、指を強引に抽挿しだしたからだだった。

——じゅぷっ！ にゅぷっ！ ぢゅぷっ！ にゅちゅっ！

「あつ、ああッ！ やめっ、ひいっ、広げるなあ!!」

「ははっ、広げないと意味がないじゃないか。これはキミが挿入されても痛くないようにって、親切心でやつてることなのに酷いなあ♥」

「そんっ、にやあッ♥ あつ、ああッ♥ これっ、ダメえッ!!」

ぐちゅぐちゅと激しい音を立てて股間で淫魔の指が蠢く度に、リーフィの背中をゾクゾクと快感が駆け上がって来る。

「ああッ、嫌なのに、どうしてこんなに気持ちっ——ひひいいッ♥」

ぐちゅりとひときわ大きく音を立てて、淫魔の指がリーフィの膣内をかき回しながら肉芽をぐりんとこね回す。

それだけで大きく腰が跳ね上がり、嬌声を上げてしまうリーフィ。

（なっ、なんだよこれ……。こんなの無理だ、耐え切れない……）

最早成す術無く、淫魔の指に翻弄されて息も絶え絶えだ。

「やっ、あつ……ああッ♥ いッ……やだっ！ このつままじや!」

限界が近くてがくがく震えるリーフィの耳元に囁かれる淫魔の声。

「いきそうなんでしょ？ ふふっ、イっちゃいなよ」

その声と共に、より一層激しくなる淫魔の指の抽挿運動のせいで、リーフィ

は大きく背中を仰け反らせる。

「あつ、ああつ♥ やつめえっ!! イクつ、イツつぐう~~~~♥」

——ふしやしやしやしや~~~~!!!

弓なりに体を激しく仰け反らせながら嬌声を張り上げ、股間から透明な飛沫を噴き上げた。

「あつ……ああつ……♥」

下腹部が痙攣し、雌の濃い匂いが立ち込める中、リーフィは自分が雌としての痴態を淫魔に晒してしまったことに絶望して涙を浮かべた。

「あははっ、初めてにしてはすごいイキっぷりだね? 可愛いねえ」

嬉しそうに笑う淫魔の声を聞きながら、余りにも理解が及ばない事態と強制的に与えられた快楽に耐え切れずにリーフィの精神がシャットダウンを始める。

「あゝあ、もう限界なの? もうちょつと淫魔として教えてあげたいことがたくさんあったのに、しかたないなあ……」

ぐったりとしたリーフィの頬をねつとりと舐め上げる。

「まあ、キミはすでにボクの眷属だから、これから時間はたっぷりあるし、しっかり淫魔として調教してあげる! 心も、『体』もね♥」

淫魔の囁き声が終わる頃にリーフィの限界が来て意識が途切れた。



いつもより力が入らない状態で、ぐったりとしながら起き上がるリーフィ。カーテンの隙間から日の光が眩しく差し込んで爽やかな朝のはずなのに、下半身がぐつしよりと濡れていて不快感を酷く感じる。

「あゝあ、これはやつちまったかなあ?」

この歳になってオネショ、ということはないはずだ。ということとは、思いつきり夢精しているのかもしれない……。

(くそお、あの夢のせいだ! 絶対にあの夢のせいだ!)

下半身にまとわりつくほどの不快感だ、どれほど派手にやったのかと恐る恐るパジャマのズボンを引き下げて下着の中を確認する。

(……は? え? なんでだ? どうしてないんだ!?)

下着の中には見慣れた男のシンボルのモノが影も形もなかった。「なつ、うっああつ……うわあああああああああッ!」

それどころか、下着の中の湿り気にはイカ臭さはなく、むせ返るような甘ったるい雌の臭いで、どう考えてもこれは愛液のそれだ。

「オレが、女の子になつて……? そんなバカな……」

混乱しながらベッドから起き上がり、鏡を覗き込む。

その鏡に映ったのは、いつも見ていたはずの男の姿はなく、すらりとした細身の中性的な顔立ちをした緑髪の少女が映っていた。

(あ……れ? オレつて、こんな姿だったっけ?)

『そうだよ? キミは元からこんな顔をしてたんだよ?』

耳元で誰かが囁いた直後、ぼんやりと頭に霞がかつてくる。

「そうだよ、オレは前からこんな顔をしてた——わけねえ!!」

抗うように声を上げると、夢の中の淫魔が鏡の中に姿を現した。

『強情だなあ、さつさと認めちゃえば楽になるのに……』

「これは、オレがこんな体になつてるのはお前の仕業か!」

『ん? 半分正解で半分ハズレかな?』

淫魔はニヤニヤと笑みを浮かべながら曖昧に答える。

『キミは集合的無意識って言葉を聞いたことがあるかい? 最近ではゲームや小説にも出てくるみたいだけど……』

「それは……聞いたことがあるような……」

リーフィとはあるソシャゲのことを思い浮かべながら頷く。

『夢や空想、幻想や神話の原型は、人の無意識下にある領域、集団的無意識に存在するってヤツ。ボクたち淫魔もそこに住んでるんだけど、この領域の中で

変化を起こしたものは現実でも影響が出るんだ」

淫魔はニタリと笑みを浮かべてリーフィの体を舐めるように見る。

『例えば、そこで体が女の子に変化しちゃった場合は……とかね♥』

『そんな……ウソだろ？　じゃあオレは……オレはこのまま女に？』

『アフターケアもぼっちり、ボクが立派な女の子にしてあげる♥』

淫魔はそう言って、溶けるように鏡の中へと消えて行った。呆然とするリーフィをそのまま置き去りにしたまま……。

「おっ、女に、女になってたまるか……!!」

リーフィはギリギリと歯を食いしばって固く決意を口にした。



——現実のリーフィの体が『女』になってから七日七晩過ぎた。

「どう？　そろそろ抵抗をやめて女の子になったら楽になるよ？」

「はっ……はあ……んう♥　ふう……ふう……んんっ♥　だれっが……あっ♥」

拘束されたままの快樂責めで見悶えながらリーフィがキツと睨む。

初めは固い決意を原動力に、必死に淫魔を睨みながら耐えていたリーフィだったが、次第に氣力を削がれ、快樂に屈服しようとしていた。

というのも、夢の中では淫魔に主導権を握られ、胸を揉まれば大きく膨らみ、尻を叩かれれば大きくなり、撫でられれば敏感になっていくのだ。当然、それは現実にも影響を及ぼして体付きはすっかり女

らしくなり、どこからどう見ても女になってしまっていた。

「ふふっ、一週間も頑張ってガマンしてるもんね？　辛くない？」

「うっ……っ……しゃいっ！　あっ……あっ……らめっ、やめろおッ♥」

激しく膣内を指で抉られる快樂に嬌声を上げてしまいうリーフィ。

この一週間、口答えするたびにずっとその繰り返しで、勝手に体は快樂を貪欲に求めて震えながら腰を浅ましく振ってしまふ。

（ああ、どうして？　どうして指ばかりなんだよ……）

連夜の責め苦に焦らされ、もうリーフィは欲求不満で潰れそうだ。

そこにひと押しでもされたら後は転げ落ちることは確定的で——。

「腰を振って強請るなんて、そんなにコレが欲しいのかい？」

ニタリと笑みを浮かべた淫魔が大きな肉棒を見せ付けるように揺らすと、リーフィの目がソレに釘付けになってしまう。

「欲……しい……。もう指じゃ満足できないんだよ……」

口から出たのは敗北を決める決定的な言葉。それを耳にした淫魔は笑みを浮かべてベッドに横たわったリーフィの腰を引き寄せた。

リーフィの愛液で濡れそぼった股間に熱い肉棒が触れる。

「あっ、ああ……♥　当たってる……これで、はあはあ……♥」

一週間に渡る生殺しの苦痛から解放されるなら、と安易な考えが浮かんでしまふ程に今のリーフィには理性と余裕が残されていない。

「さあ、リーフィちゃん。ボクにどうして欲しいのかな？」

「ああ……。欲しい。ソレを、オレの膣中に挿入してくれえ……♥」

とうとう欲望のままに敗北を口にした瞬間だった。

——ずちゅんっ!!

「うぐううっ♥　ひっ、んひいいいんッ♥」

一気に子宮を突き上げるほどの一撃にくぐもった声を漏らし、直後に感じを引き摺られるように抜かれた肉棒の感覚に嬌声を上げる。

「あらら？　初めての挿入なのに感じるなんて淫乱だなあ……」

確かにリーフィの体は『処女』であるはずなのに痛みも感じずにすんなりと受け入れてしまっていた。

しかし、楽しげな声に指摘されたそのことに対して疑問を覚えられるほど理性は残っていないかった。

「ほらほら、まだ挿入れたばかりだよ？　これからが本番だ——」

——ずちゅんっ！　ずちゅんっ！　ずちゅんっ！

激しく突き上げられる度に、卑猥な水音が弾けて響く。

「あっ…あっ…奥っ、入ってっ、きてるう♥ 気持ち、イイっ♥」

付き上げられる度に子宮が潰れて強烈な快感が湧き上がる。

ゆさゆさと体が揺れる度に頭がふわふわとしておかしくなりそうだ。

(ダメなのに、このままじゃ、戻れなく、逆らえなく、なるう……)

必死に理性が抗おうとしているのに体は従順で腰を振ってしまふ。

「ふふっ、もっと欲望に身を任せられるように手助けしてあげるよ」

淫魔がリーフィの下腹部に手を翳すと毒々しい紫色の魔法陣が現れて、卑猥な形をした紋章が浮かび上がり、怪しく輝き始める。

「あっ!? うああッ!? 熱ついッ! ひいつぐううんッ♥」

それはエロ漫画やエロゲーで良く見る淫紋だった。そして、今のリーフィにとってそれは淫魔による服従の首輪のようなもので――。

「さあ準備は整った。後はボクの魔力を注げばキミは立派な淫魔だ」

「は…え? 立派な…淫魔? オレが…淫魔っ!? んああッ♥」

大きく突き入れられた淫魔の肉棒が深々と子宮を突き上げる。

淫紋のせい、先ほど以上に強烈な悦楽がリーフィを襲った。

淫魔はフラフラと揺れるリーフィの腰を強引に掴んで突き上げる。

「あっ…あんッ♥ やっああ♥ あっぐ…くひい♥ やっらめえ♥」

ずんずんと突き上げられる度にゾクゾクと背筋を快感が走り抜け、もっともつと快楽を求めて腰を浅ましく振ってしまう。

(やだやだやだやだ! 淫魔につ、淫魔になりたくない!!)

必死に頭の中で拒絶をしても、淫紋を刻まれた体が勝手に動く。

「ほらもつと腰を振って。そんなんじや立派な淫魔になれないよ?」

「やだあッ♥ あんっ…あっ…やらあッ!! らめえええええ♥」

「ふふっ、涙でぐちゃぐちゃな顔でよがり狂うなんて可愛い♥」

抵抗すればするほど淫魔は興奮し、突き上げられる速度が上がる。

「あっ♥ あっ♥ やっだあッ! あんっ♥ だめえッ…あっ…あっ…も

う、ゆるして…! このままじゃ、このままじゃあッ♥」

快楽に身悶えて涙を零しながら懇願するリーフィに、淫魔はゾツとするほどの邪悪な笑みを浮かべて見下ろす。

「ほらほら、もうすぐ射精するよ? そしたら晴れて人間卒業だね」

――ずちゅんっ! ばちゅっ! ぐちゅんっ! ずちゅんっ!

嬉しそうに笑う淫魔の抽挿がさらに早くなり、肉棒の尖端が膨らむ。

リーフィにはそれがなんの兆候か理解でき、顔が絶望に染まる。

「あ…ひいッ♥ やっくううッ、ゆっるひてえ!! ああああッ♥」

――どびゅっ…ぐびゅッ! ごびゅびゅびゅびゅ〜!!

「うあッ…やらやらやらっ! んひいひいひいひいんッ♥」

勢い良く熱い塊が胎の中に吐き出され、リーフィが大きく仰け反りながら快感に打ち震えて絶頂を迎えてしまった。

(あっ、ああ…オレが…オレが、塗り替えられて…いく……)

脳内を塗り染める程の快楽と、子宮から全身に向かってジワジワと存在を塗り替えられていく恐怖に染まりながら絶頂し続けるリーフィ。

「あっ…ふああ♥ イク…のとまら…な…止まらないよお……♥」

「イクの止まらないの? でも、もつともつと激しくなるからね♥」

淫魔は絶頂に痙攣し続けるリーフィの体を俯せにすると、さらに背後から強引にリーフィを肉棒で刺し貫いた。

「ひい…ああ! もう、やめへっ! やめてえええええッ!! オレっ、オレ

が壊れちゃうっ、壊れちゃうよおッ♥」

「あははっ、淫魔にするんだからそりゃあ壊してあげないと、ね♥」

淫魔は笑いながら獣の交尾の様に背後からリーフィを犯し続ける。

リーフィは悪夢から目を覚ますまで延々と淫魔に、それこそ完全に淫魔に堕ちるまで雌犬のように犯し続けられたのだった。

リーフィが悪夢の中で淫魔に犯し続けられて淫魔に堕ちて目覚めると、現実でもリーフィという存在は『可愛い女の子』になっていた。

それでも、これまでの生活を変えずにネット上では『リーフィ』として過ごしている。

好きなTSネタのイラストをネットに上げ、親しい知り合いに『リアルリーフィちゃん』がサキュバス化するのはいつですか？』と絡まれては「オレがサキュバスなはずないだろ！」と答える毎日……。

それでも、サキュバスになったリーフィに変化はあった。

最近、リーフィは積極的にオフ会に参加を繰り返し、更に女になった自分を積極的に配信サイトで『顔出し配信』して晒し始めたのだ。

『そんなに疑うなら今度オフ会で会って確かめればいいだろ！』
艶やかな笑みを浮かべながらそう返信して舌なめずりする。

「ふふっ、今度のオフ会楽しみだなあ！」

魂を『サキュバス』という存在に染め上げられたリーフィは、オフ会に参加する度に参加者の男たちを魅了していった。

少年らしい中性的な性格で女らしく気取らずに、友達のように男と気安く肉体的な接触をする美少女に男が靡かない訳がない。あつという間にオフ会常連にまでになって『姫』の地位を確立してしまった。

そして――。

「楽しみだなあ、最近みんな優しくしてくれるし、それに……♡」

そしてリーフィはいつの間にか、オフ会参加者にお持ち帰りをされ続けて、精を搾取する本物の淫魔へと覚醒していくのであった……。

(お・し・ま・い♡)



「――って感じのエピソードが、サキュバスリーフィちゃんの背景設定にあるんだと思ってるんだけど、どうかな？ チラッチラッ――」

……。

……………。

この後リーフィちゃんにすごく怒られました(オワタ)



ファイのアルバイト体験

作者:三日月ネコ



HAPPY END





リーフィさんは本当は存在してなくてTSF好きの生み出した概念なのではないか。
それを証明するにはこの漫画のページ数は短すぎる。 by いるこ (回11_188)



自分を偽り
窮屈に生きるニンゲンの心へ
私は問いかける

んあ♡

あ

人ア♡

イ
ク

ガ
ク
ガ
ク
♡

どんなに強がっていても
ホントウノキモチには逆らえない……
そう……きつとあなたも……





ボロッ
やられた

お前だけでも
逃げる…っ
リーファイ!!



優しい勇者様ね♡
やられた仲間の為
かばうだなんて



クス♡

仲間想いなものね♡
『この世界』の勇者…
気に入ったわ

これは親愛の印よ♡
私の仲間になりなさい

死んでも嫌だぜ!
今に見てろッ
すぐ逆転して…



はっ♡

『淫魔の種』よ♡
私の魔力が根を張り♡
淫魔に変える新秘術♪

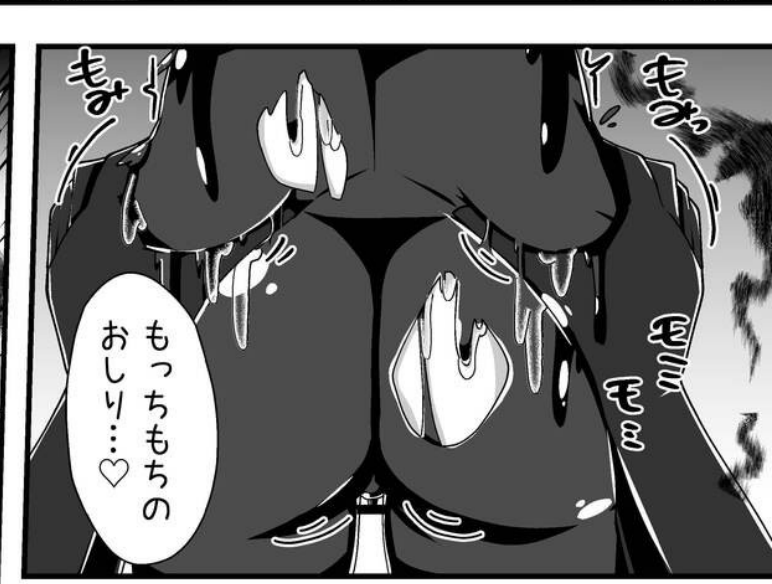
素敵な華になってね♡
仲間想いの勇者様♡



そう言わずに…ね♡
素敵な種だから
『植えて』あげる♡

な…何の種だッ!?

ズフフ…♡





可愛いイキ顔♡
男として自覚ある？

ちがっ…ましゅ♡
俺…『私』…淫魔♡
えっちな淫魔でしゅ♡

オヘ♡

ち…違う!!
だって…

へ♡♡
つまり私の仲間ね？

あ♡♡
この素晴らしい身体の為なら♡
えっちなことも悪いことも♡
なんでもしちやいます♡♡

私はご主人様の
ただの下僕♡
服従する下っ端淫魔です♡
ん♡♡

モン♡



ならそこで寝てる
あなたの大切な仲間を
淫魔にしなさい♡

そしたら…

えっちなご褒美あげる♡
どうする？

仲間か…快楽か♡

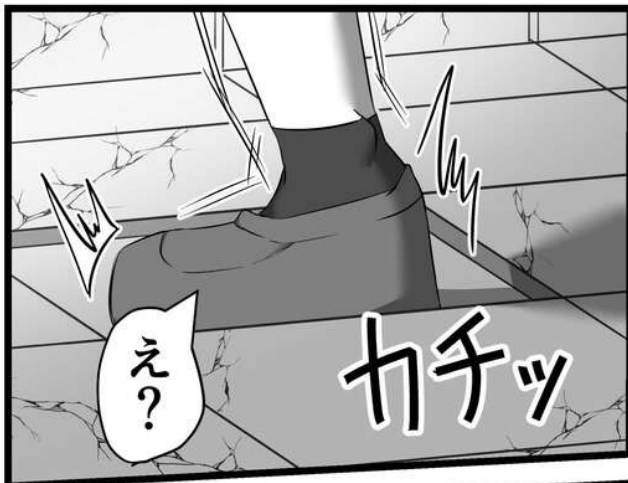
…キャハッ♡
見ててご主人様あ♡

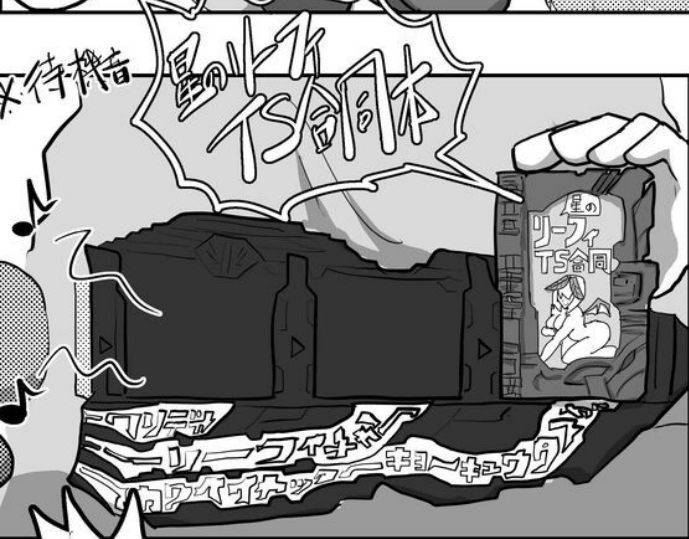
とろとろおっぱいで彼を拘束し♡
淫魔の魔力で覆い身体を整え♡
彼が私と同じ末路を辿るのを…♡

ご褒美の為♡
お前だけは
逃がさないから♡

ん♡♡
やわ♡♡

ズプ♡♡







あら、可愛い子が
いるじゃない♡

ぴやつ!?

むぎゅっ♡



オイ…これ
ちゃんと元に…

いねえ!?

つつぜん



ねえねえ?
戦いなんかどうでもいいし?
一緒に気持ち良くならない?

んなっ…!?
お、俺は男だ!

あら?
そうなの?

なら女の
気持ちよさを
いっぱい教えて
あげるわね♡

やめっ…!?
あ、あゝゝゝ♡♡♡

数日後：

うわーっ！
ヴィランだー！？
逃げろー！！
モゴ

そうね♡
それじゃあ今日も
沢山暴れて
楽しむわよ♪

ふふ♡逃げ惑う市民を
見るのは楽しいですね
お姉様♡

ふふ♡

はいっ♡お姉様♡
リーファイ頑張りますっ♡



**ローフィくんが
メスローフィになるだけ〜**

Presented by delta-TSF
(Jupiter D Zweistein) @DZweistein

かわいいリーフィくんを
性転換しちゃうぞ♡



男の子になってから
女の子になろうね♡



おっぱいがふくらんで♡



おしりもおっきく
なーる♡

これで
リーフィくんは
女の子♡

ぐえっへっへ

やったね♡



コラ!!

俺を
女体化しようと
する悪者め!!

くっ!
バレたか
さすがは
リーフィ!!

カッコいい
リーフィめ!!

見え透いた
お世辞はノーセンキュだぜ
でもありがとう!!

ふふふ
バレたか
これを食らえ!!

ご都合女体化
&
くすぐり
アームの術

は?

は?

TSエネルギー：20%

ギョ
あつ
あつ!!

敵の罠に落ちた
リーフィちゃん!!
一体どうなってしまうのか!?
次回『リーフィちゃん死す!』
(ついでません!!)

TSエネルギー：80%

◆あらすじ トランソードの真の力を開放したリーフィ。その反動でえちえちサキュバスになってしまった。そうまでして勝ちたかった敵とは…



賢いキミなら
状況が解るネ

HAHAHA
HAHAHA



さあ、これで
おしまいに
しようじゃないか

カッ

身リフトとさ、
謎の医者

Root!4



そんな……オレ
オトコを捨てて

ここまでしたのに
歯もたたないのか……



リーフィさん
麻酔うちますねー

ふ、ふあい……

リーフィ
虫歯完治まであと4本

豆知識…トランソードは斬った敵を変身させられる剣だ！

ただ使用者も魅力的な体つきになるので注意

リーフィちゃんの えっちな日常

作・絵 daice

この頭から葉っぱの生えた女の子は
元々男だった俺の同居人だ。

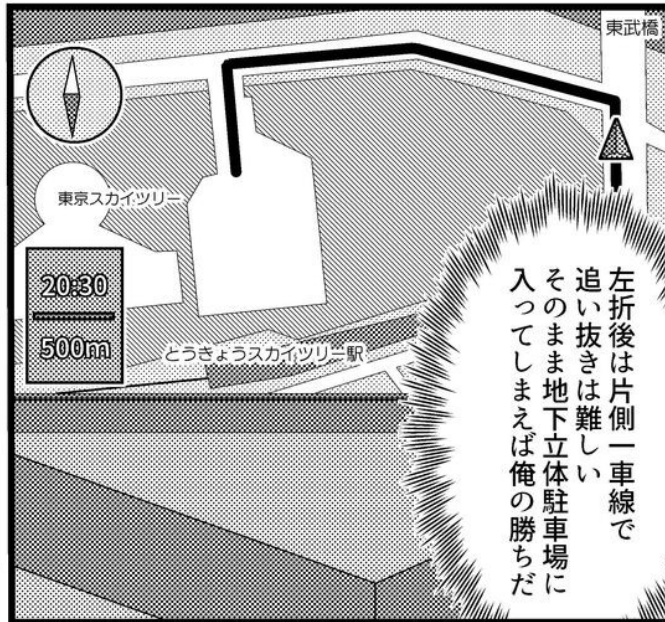
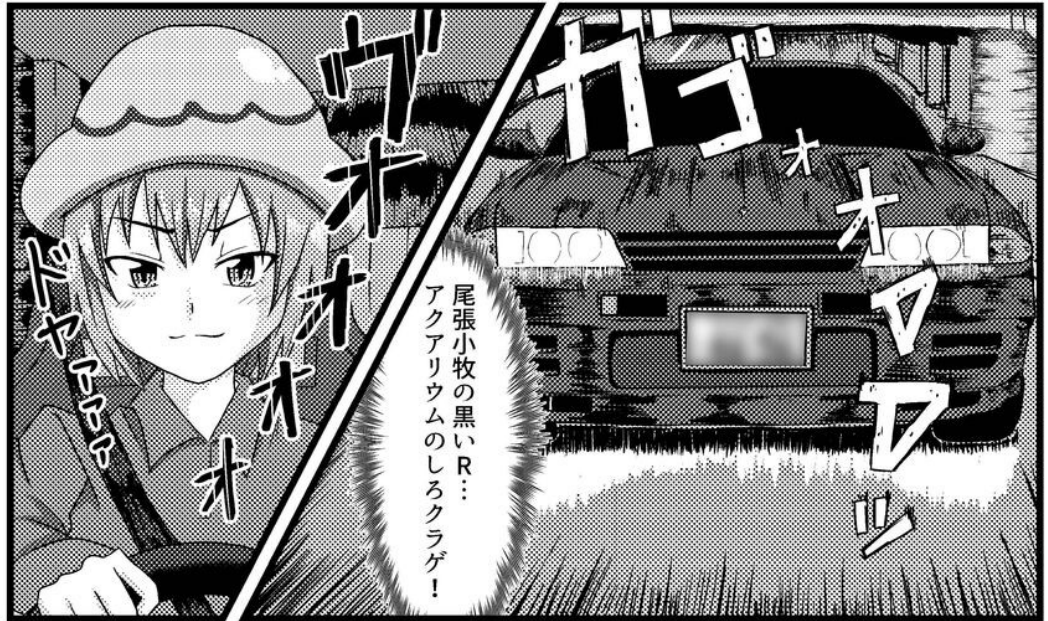


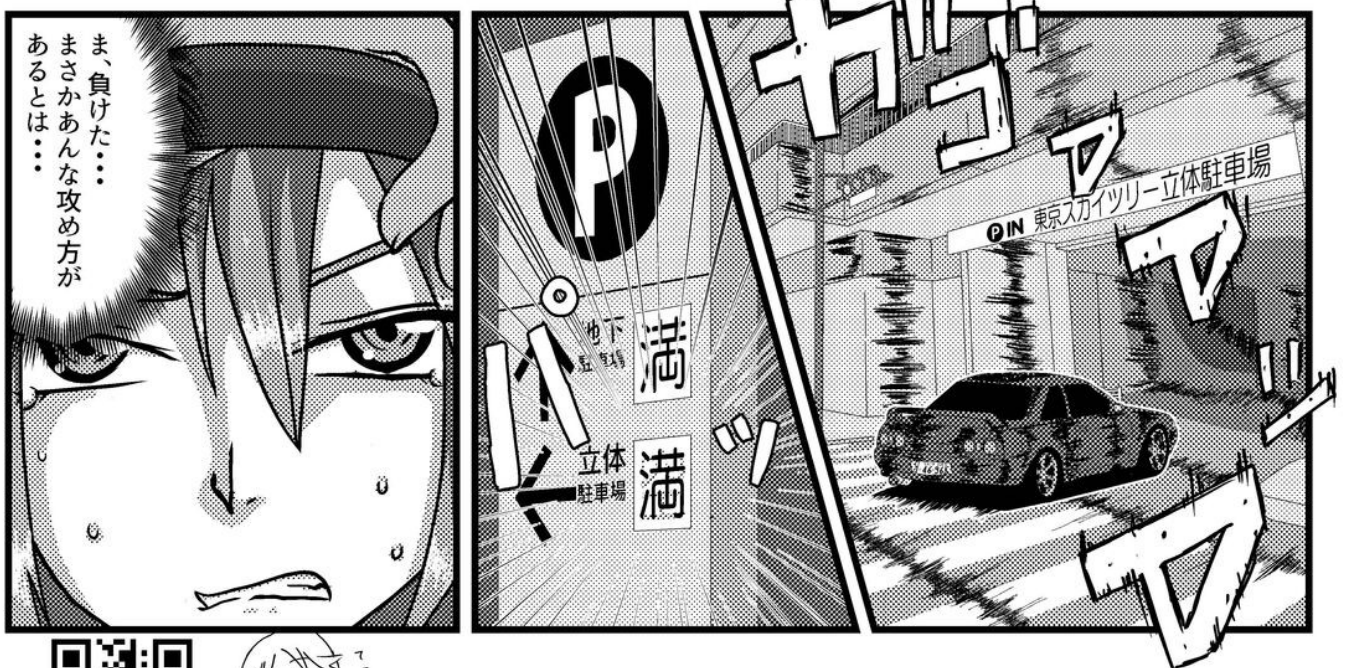
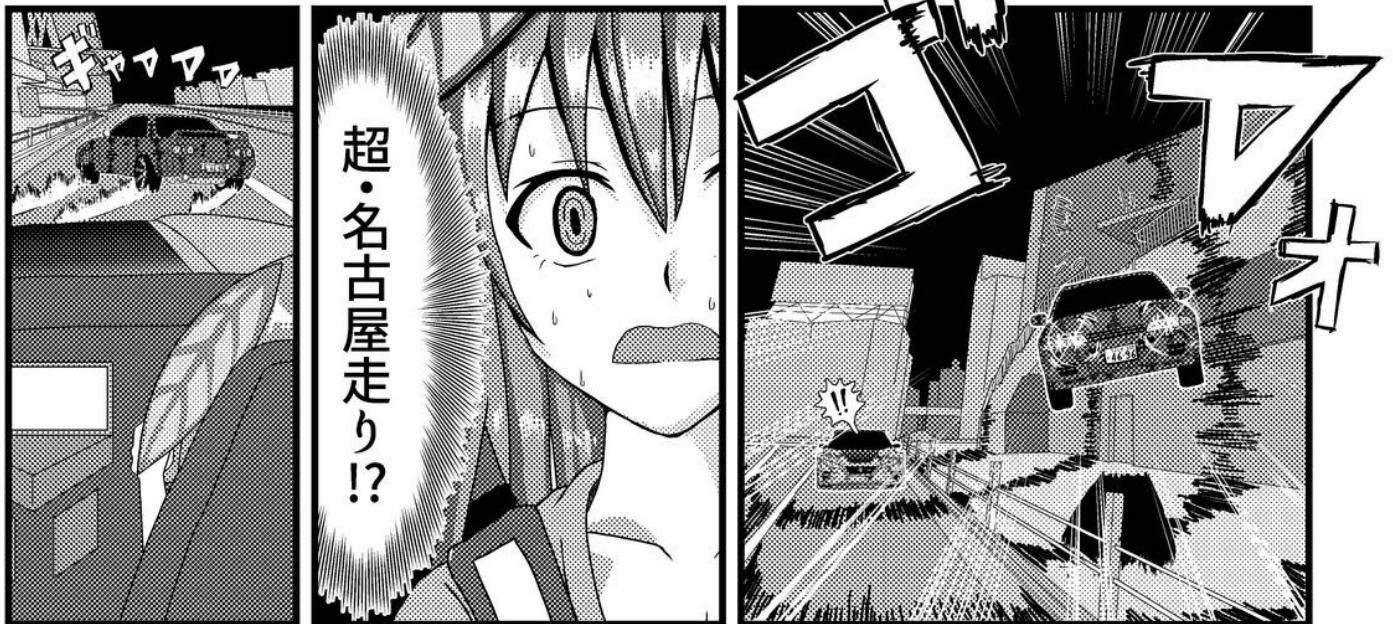
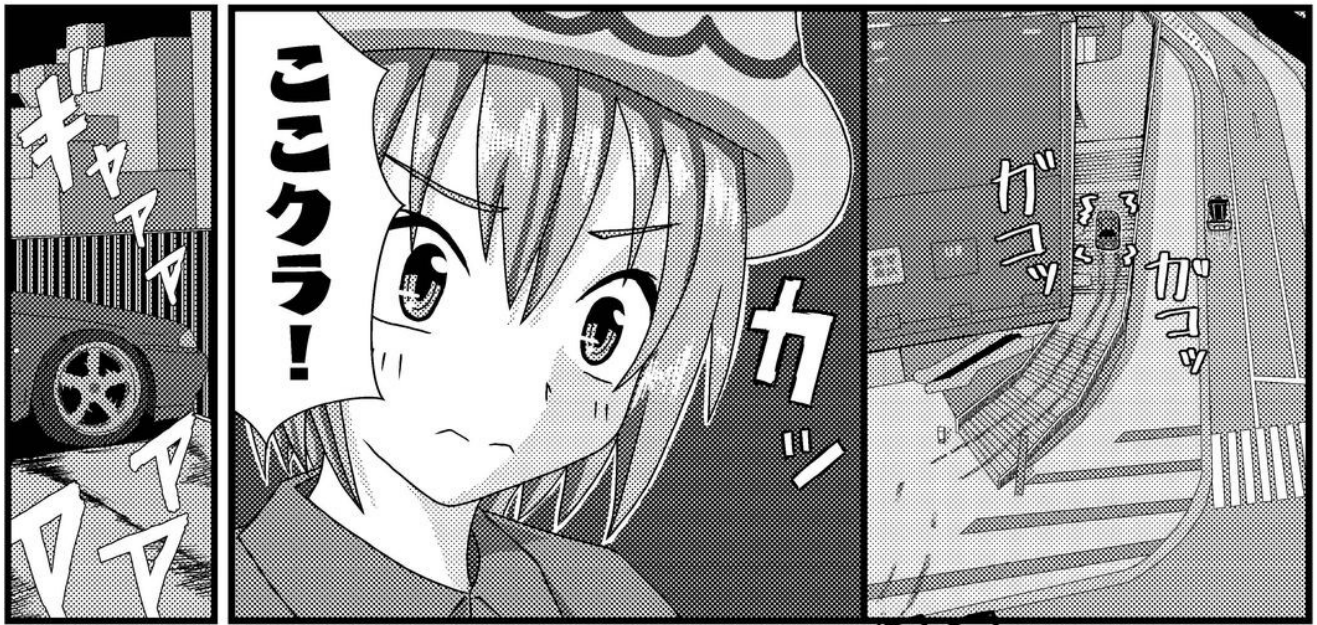


◆ 甲高いスキール音が静寂なスカイツリーに響く!!



この物語はフィクションであり、登場する人物・地名・団体名は全て架空のものです。
車の運転は交通ルールを守り、安全運転を心がけてリーフィさんの女体化を楽しみましょう。





とりあえず、どこかに車を停めて
店に急がないと!!

某カフェ
20時50分頃...

すみません
ラストオーダー前で
満席のため
ご案内する事が
できません...

つつっ

アッアッ

ガーン

おーい
はっぱあゝ

一緒に相席で
食べようぜ

Ara Ara
Kawaii Ne!

Ore HA
Otoko DA!

はぁ...

今度は、絶ツツツ対に
負けねえからな!!
見てろよな!

言ってる、言ってる
次も俺が勝つ

◆クラリーは、いいぞ!

完

これまでのあらずじ
突然現れたド変態露出痴女のサキュバスリーフィに「若き日の私よ」と言われたリーフィ。
このままではド変態露出痴女のサキュバスになってしまう。そんな未来を変えるべく、
リーフィの「最高最善のTS娘」を目指す戦いが始まる。
祝え！真のサキュバスの誕生を！

※この漫画はギャグ漫画です

なんやかんやあって
リーフィは悪の組織に
追いつめられていた。

くそっ……
このままじゃ……

変な男からもらった
このベルトで……

前見えねえ！

お？

回るの俺かよ！

タイム

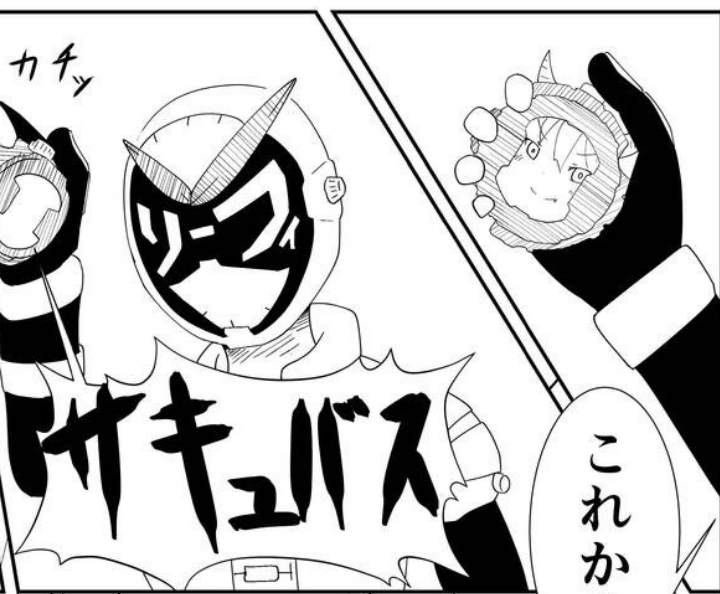
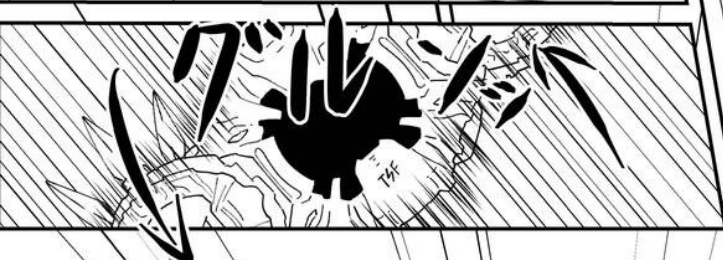
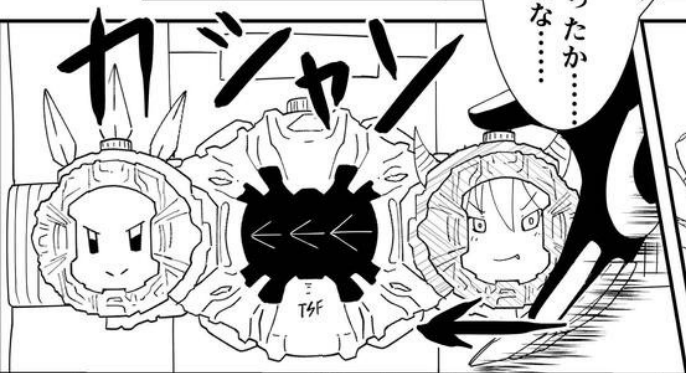
TS娘



サキュバスアーマーなら
即死だった……

ほんとになってるわ……

くっ、適合者だったか……
だが危なかったな……



よしっ!

カ



カゴン

はあっ!?

ぐああああっ!?

バタ

多分……
これか?

カチン

ロリーファイ?

ロリーファイアーマーなら
私も即死だった……

くつ……

だが俺は
ロリコンだから
そんなもの

お、はい……

ロリー、

死

えええ……

あああああああ
あああああああ
あああああああ
あああああああ

ビュン

ズル

END

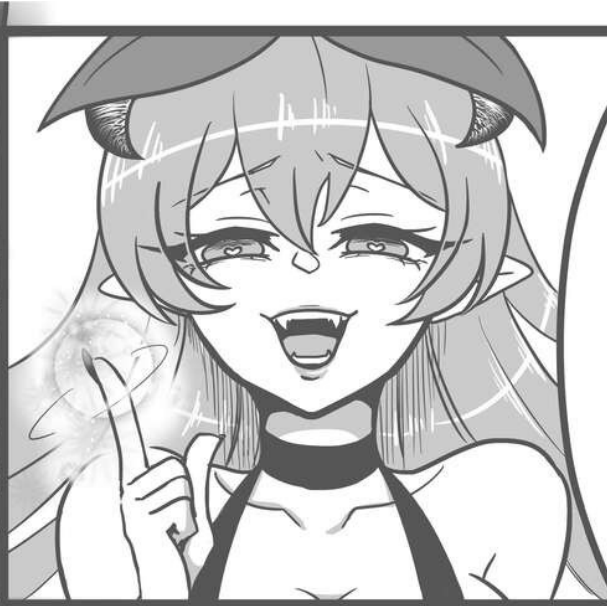


もう、
そんな怒ら
ないでよお...

アナタ好みに
大きくも、小さくも
なれるんだから♡

もちろん、
そのままでも
いいわよ♡





どんなアナタも
かわいいわよお♡





美少女王への道

作・しろクラゲ



俺は勝って絶対に男に戻ってみせる…!!

ここまで沢山の強敵達と戦ってきたがこれが最後…

これに勝てば何でも願いを1つ叶えてもらえる…

…ついに来たぜ
美少女一武闘会…決勝戦

見るからに真っ向から戦うタイプではない…
こういう相手には…

気絶もしくは武舞台から10秒以上姿が見えなければ敗北…油断はできないな…

…ッは!?

それはどうかな♪

攻撃で終わらせるッ

最初から全力でッ!!
ぶつけるッ!!

はああッ!!



ん...?
動きに違和感が...

何だと!?

あら身体の変化に
気が付いてないの?

...クソツ!!

いつの間に...ツ!!

あ
ッ



俺の身体に
何を...

あ
ッ



ってうおおおおおい!
何か胸が少しだけ
デカくなってるんだが!?

!?



胸が膨らむ呪いよ
これからどんどん
大きくなるわ

良い大きさに育ったら
眷属にしてあげるわ♪

おまつ
サキュバス
リーファイ!?

さあて...そのおっぱいで
ちゃんと戦えるのかしら?

うぐツ...!!





ふふふ…不思議だろ
弱体化したハズの俺が
いつも以上の力で戦える事…

私のせいで…?
胸を大きく…
重く…

自分の首を自分で
絞めたってとこかな

ハッ!?

まさか貴女…!!
その…ッ!!

クソデカ胸を
揺らすことで
遠心力を生み出し

一時的に
攻撃速度を
上げていたと
言うの!!

気づいた所で
もう遅いぜ!!

アハハ!!
終わりなのは
貴女よ!!

ちようど胸も育ってきたし
何よりその動きは速いだけで
単調なのよねっ!!

これでフィニッシュさ!!

おどろおどろい!!

うぐううう

さあ…
生まれ変わらなさい!!

ンナアアアアアア!

何ダア!?
コノスガタア!?

ワタシ…シャベリカタ
何カオカシイ…!?

とてもお似合いの
姿よ…眷属ちゃん

サキュバス
リーフィ様ツ

アナ様ノシワザ
ナノデスネ!!…
ウツ…コトバガ…

アハハ
そうよ!!

今日から貴女は
サキュバスの
女の子よ!!

おおーっと!!リーフィ選手が
居なくなつたので!!
優勝はサキュバスリーフィ選手です!!
(審判)

エエツ!?

ソウ!!
ワタシハ
サキュバスダ!!
アツチガウ…
ワタシハ…

チガツ…ワタシガ…

ん?貴女が
リーフィ選手なの
ですか?

違うみたいですので
優勝品の贈呈に
移りますね!!

サキュバスリーフィ選手
願いをどうぞ!!

え?そうね…じゃあ
あの娘の名前を
“おっぱいちゃん”にでも
変えてあげて

アアアアア
アアアツ!

その後リーフィちゃんは
永遠に元に戻れずに
おっぱいちゃんとして過ごしたらしい

おっぱいちゃん
次はソコの掃除もお願いね♪
勿論おっぱいで拭いてね♡

カ…カシコマリマシ…タ

オッパイチャン…
ガンバリ…マス…ツ!!



奥義3： リーフィ祭り

祝

女体化記念
リーフィ人気投票
結果発表!!!

みんな
ありがとう

キミのお気に入りの
リーフィは何位だったかな?
たくさんの投票
本当にありがとう!!

第6位	リーフィ (メイド服)	301票
第7位	リーフィ (スクール水着)	258票
第8位	リーフィ (ナース服)	199票
第9位	リーフィ (チャイナ服)	176票
第10位	リーフィ (ミニスカポリス)	89票

第1位
メスリーフィ
5071票

親友に感謝♥

第2位
オスリーフィ
3072票

フン

第3位
サキュバスリーフィ
1802票

リーフィに
負けた…

第5位
イメチェンリーフィ
514票

順当な
順位ですね

第4位
一頭身リーフィ
721票

だあ
かあ
らあ

おっぱいはっかかり盛りすぎだつて
手もただ細いだけで色気ないし

あと腰周り
太ももは太すぎて変だし
くびれもちよつと
かくかくしてるわよ
もっと勉強した方が
良いんじゃない？

リーフイちゃん

ホント
女の子の体のこと
分かってないわよね

受難

ハチャ

じゃあ女の子
「なって」一緒に
お勉強しよっか♡

ふっん♡

女体のことなんか
分かるわけ
ないじやろがい!!!

や、ちよつと
そうじゃなくて…
ちよ…やめっ…!!

だあ
うるへく
!!
分かりたくても
こちらら男なの!!

アッ



しゅわん♡

まあずいぶんと

可愛く

なったわねえ♡

ふん♡



ね♡

そう思わない?♡

んんん!!

それじゃ♡

女の子の体
について:

お勉強して

いきましようか♡

んんんん



まずはおっぱい♡

ただ大きいだけじゃダメ
柔らかくて自分でも
揉みたくなるように
えっちに描かなくちゃ♡

それから
オマンコ♡

ココはとおろつても
大事なト・コ・ロ♡
だからあ♡

じっくりと
丁寧に力いてあげて♡

くびれ、太ももも
もっちり柔らかく♡
線を引こうと
思っちゃダメ♡

ぐんぐん♡



ほおら♡ ♪ ♪ ♪

もっと身体で感じて♡

ココロに刻んで♡

気持ち良くなっちゃえ♡

ぐんぐん!♡

あらっ♡ ♪ ♪ ♪

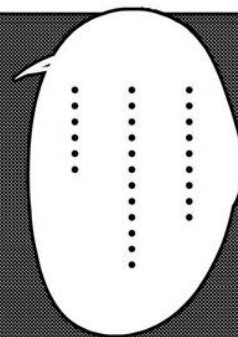
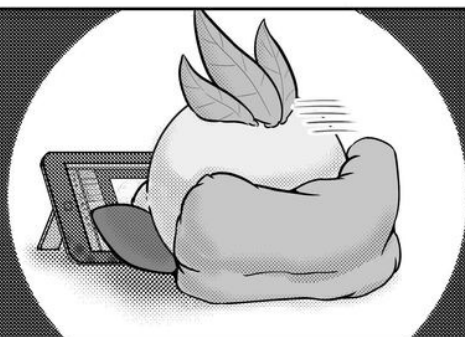
もっイク♡

もっイっちゃいそう♡

イイよ♡

我慢しないで♡

ほおら♡あともうちよつと♡
がんばれ♡がんばれ♡



前よりスラスラ
描けてる気がする
そう思う
リーファイちゃん
であった



なんかめっちゃ雑に
女にされてる上に

胸も大して
でかくない!!



また女になってる!!



背景もない。

そうそして
この漫画には
時間も無い

なので君には
さっさと女に
なってもらった



このアンソロ
18禁だから
早くエロ
描きたいし

俺のエロを
描けとは
言ってるねえ!!



うわっ
なんか一頭身かぶり
してる奴がいる!!

なに人を勝手に女体化
してくれとんじゃ!!



そうは言っても
このアンソロを読む
人間は全員この展開を
期待してるよ

諦めて読者の期待に
応えなさい(無慈悲)

ぱーん

エロも雑!!

もうアンソロは
こりごりだーっ!!

☆また主催してねー



やったのか…

ああ
サキュバスリーフィは
完全に消えたよ

ところでその…
プリンスフォームだっけ？
かわいいな

プリンスフォームだっつの
かわいいとか言うな



もうこの姿も役割が
終わったから
元の男の姿に戻るけどな…

リーフィちゃん 最終回『Rify』

作・画 くまのみ。

なっ

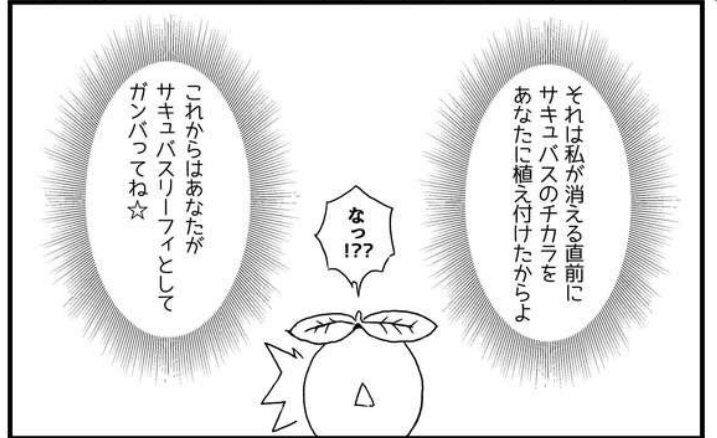
—お前の気持ちは
知ってるけど…ゴメンな

パッ

親友

俺が男に戻っても
親友でいてくれたら
うれしいな





温泉旅行に来た
リーフィさん

カポーン
湯の湯

温泉サイコー！
来てよかった

そろそろお楽しみみの
バイキングの時間かな？
上がるかー

ビシヤ

ん？

なんでや！
TSの湯って何？

ぽよん

ボウ

誰か来る前に
元に戻らないと…

おた
おた

あれ？

作：星野かえで @ xkaede518

リーフィと！

墮
劇場

とらんず
TSの湯



また私の邪魔をするのね？
もう一人のわ・た・し。

誰がもう一人の
私じゃボケエーツ！
ただの女の子に手を出そうとして、
お前はなにを考えてんだ！

頭中火葬リーフィ
作！はんげしょう



はいっ！

早く、行け！

アンタは逃げな。
ここは俺が
相手をする。

大丈夫
なんですか？

俺は男だからな。



よく吠えた。

でも、残念。
一撃で終わりよ。

よくも今日の獲物を
逃がしてくれたわね。
私、今日機嫌悪いのよ。

お前は俺が
倒してやる！







：朝起きたら
胸がなんかはれてて
オレ：死ぬのかな：

わなわな

ええ？
太っただけっしょ

これは太ったのではない
超女体化サプリメント
エッチスルホドメスナールの
効果である

そうか！
そうだよな！
頭いいな！
すずかだぜ！

ふむ…バレてない
そう…彼は
単純なのである

おい！
なにしてんだよ！！

え？
なにして
胸もんでんじゃん

なん…で…だ…よッ！！
変態かつ！！

バカ言えっ
こういう運動だよ
脂肪燃焼させて
きもちっしょ？
もう明日には
もっとなおーりぞ！

そうか…悪かった
たしかになんか
きもちい感じる
ちよっといたい

ちなみにサプリは
エロいことする度に
身体の女体化が進むぞ

次の日

どうなってるの!!

元にもどるどころか
大きくなってんじゃん!!

もしかしたらこれは…
女体化病かもしれないな
早くなんとかしないと

なんだってーっ!!
どうすればいいんだっ!!

もじもじ…
ちよいとかな…

もちろんそんなものはない
サプリがあっても病気はない
そういう設定!!

おっおっおっ!!

ほんほにほれっつ
(ホントにこれ)

この病気を治すには
男性の精を
摂取しないといけない

かまんして
飲んで!!

うえっなんでオレが
こんなことしないとい
でも…元にもどるためだ
飲み込むしかない!!

おっおっおっ!!

おっおっおっ!!

おっおっおっ!!

おっおっおっ!!

そろそろ
ほぐれてきたかな

んあ？

あっすげえ！
しめつけられるっ！！

でもやっと…
これでもとに……

おほああく

もとに
戻れるんだっ——！！

戻らなかった

あはあ

あは

おちんほ
しんあ

HAPPY END

リーフィちゃんは
やっぱり女の子だなくっ
お汁がどんどん溢れてくるよ

リーフィちゃんの子
じゃないもん

そんな事言っ
て感じて乳首までピンピン
じゃないか

やあ
見あ

ドクン
ドクン
ドクン

いぬこむ

…それじゃあ
本番行こうか

ん



はーい、一丁
あがりっ♪

こんなはず…
じゃ…ない…
くしょおお…♪

その姿で
売り続ければ
版權問題
解決じゃない！

最悪な方法で
解決された！

ひろみ
さきめばす

もう嫌だ！
こんな空間
いられるか！
男が消えちゃう！

それでは皆様
「リーファイ合同
りたーんず」
ありがとう
ございましたー

少しでも
楽しんで
頂けたら
幸いです！

うわあああ
締め挨拶まで
取られた！

もう！
合同なんて！
こりごりだー！